

公開講演会要旨

仏堂に於ける聴聞の場について 中世の仏堂の内部は、内陣・礼堂・後戸・脇陣（局）等に分割されていた。俗人が仏堂に参詣し、或は法会を聴聞する場合、仏堂内部のどの場が用いられたのか。『石山寺縁起絵』を通覧すると、側面の脇陣を用いる場合と、礼堂内に置畳と帳で仮設の局を設ける場合との二様がある。『兵範記』『中右記』『門葉記』等の記録や指図によれば、法会の聴聞を行う際は、仏堂の形態を問わず側面の部屋を用いており、僧と法会を媒介として俗人が参詣・聴聞を行う際は、仏堂の側面から行うのが原則であったと知られる。これに対し、礼堂内で参詣する形は法会を伴わない場合が多く、略式と思われるが、この場合でも、参詣者は潔斎を行い御師を仲介者とする等、然るべき手順が必要であった。（山岸常人）

“庭園と眺望” 庭園から庭園の外の風景を望み見る“眺望”という行為は、日本庭園史上古くから存在する。そしてそこにみられる眺望の形式と景観のあつかわれ方は、時代とともに変化している。眺望を規定する要因として、建物内部の空間配置状況、庭園内部の空間分節、そして、その時代の都市と自然との関係に規定された自然観の3つがある、この3者の相互関係の変化が、庭園における眺望の変化として現われる。

本講演では、以上の仮説に基づいて、眺望対象が共通し、作庭年代の異なる3つの庭園をとりあげ、眺望の形式と景観のとりあつかい方に関する変化の過程を追跡した。事例検討の対象としたものは、平城京左京三条二坊宮跡庭園（8C）、慈光院庭園（17C）、依水園庭園（20C）で、いづれも奈良地方に存在し、奈良盆地東方の春日山系を眺望の対象としている。（本中 真）

青蓋・青羊・黄羊・三羊…… 鏡銘にみえる災異思想漢中期の鏡の銘文に青蓋・青羊・黄羊・三羊をもつものがある。これらの銘文の意味については従来あまりふれられるところがなかった。蓋・羊は仮借で祥と読むべきであり、その意味は『漢書』五行志に記載される不祥の意味での五色の祥ととらえられる。そして、それらは災異現象の最悪のものである。祥は天が王の政治・行動などを諫めて表す現象であり、それに応じて王が慎んで徳を積めば、災いを福に転じることができるのである。鏡銘に表された祥は福に転じたことを表示しているものといえよう。これらの銘文をもつ鏡の大半は龍虎鏡であり、他の鏡の銘文に認められる「左龍右虎辟不祥（祥）」を図像で表現したものととらえられるのである。（立木 修）